

2306 離島覚書（鹿児島県奄美大島）



ウキペディアより引用

奄美大島には仕事の関係で数度訪問している。島旅を始めてからは、喜界島（2012年12月）、加計呂麻島（2015年6～7月）、与路島・請島（2022年7月）を訪れた折に奄美大島を経由しているから、北部の奄美空港と南部の古仁屋を結ぶ国道58号を何回か縦断した（正確には国道58号の起点は奄美市笠利町の赤木名で、終点は瀬戸内町の古仁屋）。ただ全島を巡ったことはなく、紀行文も書いていなかったのが今回の訪問となった。

奄美大島はもともと名瀬市、笠利町、龍郷町、大和村、住用村、宇検村、瀬戸内町の1市3町3村で構成されていた。2006（平成18）年に名瀬市と笠利町、住用村が合併して奄美市となった。したがって、現在は奄美市と龍郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町の1市2町2村に再編されている。なお、奄美大島の属島のうち有人島は加計呂麻島、請島、与島の3島であるが、この3島は瀬戸内町に属している。

瀬戸内町と宇検村には与路島・請島の帰りに地区内を回り、紀行文を残しているのが、今回は旧笠利町、龍郷町、旧名護市、大和村、旧住用村を調査することにした。

奄美大島は鹿児島の南約380kmに位置し、面積は712.36km²、周囲は461.0kmで、北方領土を除くと、佐渡島に次ぎわが国第2位の広さをもつ。北東と南西にかけて細長い島で、北東部の旧笠利町には平地が比較的多いが、それ以外は山岳地帯となっていて、平地はほとんどない。最高峰は湯湾岳の694mである。

【笠利地区】

令和5年2月18日

奄美空港

鹿児島空港を7時25分に出発したJAC（日本エアコミューター）便は8時30分過ぎに、奄美空港に着いた。前日、壱岐島から博多に出て、新幹線で鹿児島に入ったが、奄美大島は福岡に比べるとだいぶ暑い。

奄美空港は奄美大島の北東端にあり、旧笠利町の東海岸中央付近に位置している。日本復帰（昭和 28 年 12 月）のおよそ 10 年後にあたる 1964（昭和 39）年に旧奄美空港が開港した。しかし滑走路長は 1,240m だったため、ジェット機は発着できなかった。そこで既存の滑走路の延長を目指すのが、結局、用地買収が進まず、新たに海面を埋め立てて現空港がつけられたのだった。

現空港は 1988（昭和 63）年に開業しているが、これによってジェット機の就航が可能となった。ちなみに旧空港は現空港の南側内陸部にあり、跡地には後述する「奄美パーク」が整備されている。

奄美空港は、羽田、成田、伊丹、関西、福岡、鹿児島、那覇、喜界島、徳之島、与論の各空港と結ばれている。運航する航空会社は JAL（日本航空、JAC 日本航空系）、SKY（スカイマーク）、AP（ピーチ・アビエーション）の 3 社である。

一方、海路は鹿児島港と奄美港を結び次の 3 つの航路がある。何れもフェリーだ。

① 鹿児島港～トカラ列島経由～奄美港（十島村、週 2 便、所要時間 16 時間 20 分）

② 鹿児島港～奄美港～徳之島ないし沖永良部島（奄美海運、週 3 便、13 時間 30 分）

③ 鹿児島港～奄美港～那覇港（マルエーフェリー、マリックスライン、毎日、13 時間 30 分）

また離島間では、①徳之島と古仁屋港（奄美海運、週 3 便、2 時間 40 分）、②沖永良部島と奄美港（奄美海運、週 2 便、4 時間 50 分）の間に、2 便のフェリーが就航している。

フェリーは荷物を運ぶことが主目的である。船は時間がかかることと、便数が少ないこと、欠航の可能性があることなどから、物好きな一部観光客に利用されているだけで海路の利用は圧倒的に少なく空路に依存している。つまり奄美空港はまさに島の玄関口なのだ。

シマ（集落）への誇り

笠利地区（旧笠利町）は奄美大島の北東端に位置する。市町村合併によって奄美市になったが、旧名瀬市との間に合併に参加しなかった龍郷町が残っており、奄美市の飛び地なのだ。

現在の行政区分は薩摩藩統治時代のものを受け継いでおり、笠利地区はその当時の笠利間切の笠利方に相当する。1609（慶長 14）年の薩摩藩侵攻以降、奄美大島は同藩の直接支配を受けることになり、本土から奉行（代官）と補佐の役人らが赴任することになった。そして 1634（寛永 11）年までは奉行が仲裁する本仮屋（役所）は現在の笠利集落に置かれていた。その後、1801（寛政 13）年までは名瀬と笠利地区の赤木名集落に交互に置かれるようになった。つまり笠利地区はかつて奄美大島統治の中心地だったのである。

2020 年国勢調査時の笠利地区の人口は 5,364 人で、世帯数は 2,524 戸であった。1955（昭和 30）年の人口は 11,247 人だったが、その後減少の一途を辿っており、この間に半分以下になっている。

笠利地区には全部で 29 の集落がある。集落のほとんどは海岸沿いに分布しており、内陸部の集落は川上と平の 2ヶ所だけだ。東海岸（太平洋岸）の集落は南から用安、節田、和野、方屋、城間、宇宿、土盛、崎原、須野、辺留、笠利 1～3 区、用の 15 集落、西海岸（東シナ海岸）の集落は同じく南から喜瀬 1～3 区、打田原、前肥田、手花部、中金久、屋仁、佐仁 1～2 区の 12 集落である。

笠利地区は半島地形で細長く、東側の半分は平坦でサトウキビ畑が広がっているのに対し、西側は山岳地帯になっている。西側は川沿いにわずかな農地があり、集落は川沿いに形成されているケースが多い。

各集落の人々は土地への帰属意識が高く、各集落の中心部には「集落ものがたり」という集落紹介の観光案内板が設置されている。また、「集落歩きガイドブック」という小冊子を奄美市笠利総合支所の産業振興課が制作するほどの熱の入れようだ。このように奄美大島で集落への帰属意識が高いのは、宗教に根ざしたひとつの「シマ」を形成する歴史があったからだろう。各集落は背後に神山を抱え、ここから神道が伸び、麓には聖泉と呼ばれる湧き水がある。神道は集落の中に伸びていき集落の行事を行う広場へとつながる。現在、この広場には集会所が建てられ土俵が置かれているところが多い。広場に隣接してノロ役の屋敷・トネヤが置かれていた。

空港の近くのトヨタレンタカーで車を借り、笠利地区の東岸を北上、島の北端の笠利崎を経て、西岸を南下するコースを走り、笠利地区を踏査することにした。



東海岸沿いに形成された集落と農地（左）、各集落の中心部に設置されている「集落ものがたり」の看板（右）

宇宿漁港

最初に空港のすぐ北にある宇宿漁港（第4種）に行った。ここで家から着て来たセーターなどを脱ぎ、奄美仕様の衣服に着替える。

この漁港はサンゴ礁を掘削して掘り込んだ漁港で、復帰直後の1955（昭和30）年に漁港に指定された避難港である。

港の沖に平坦な喜界島が横たわっている。漁港の斜路には陸置きの漁船が2隻、漁港内には15隻の漁船が係留され、この地区は比較的漁業が盛んなことを伺わせる。ただし漁船は何れも5トン未満船で、うち1隻は遊漁船であった。漁船のほとんどはトロリング用の竿を積んでいたから、曳釣りが盛んなのだろう。

漁港用地では製作中のテトラポットを積むヤードがあり、近くで港湾工事が行われているようだ。

実はこの漁港には思い出がある。喜界島からの帰路、飛行機が欠航になり、船で奄美大島に渡った。小さな漁船にたくさんの乗客が乗り込み、時化の海をやっとのことで辿り着いたのがこの宇宿漁港だった。船内は油臭く、エンジン音が鳴り響き、吐く人が相次いだ。

港に着くと奄美大島在住の人はそれぞれ迎えの車がきて去り、地元以外の方は真っ暗闇

の中に取り残された。やっと迎えの車が来て奄美空港まで送ってくれたのだが、すでに空港は閉鎖されていて、途方に暮れる事態となった。最後まで残ったのが私と出張で来ていた医師であった。幸いこの医師の同僚が迎えに来たのでこの車に乗せてもらい、何とか名瀬のホテルに入れたのだった。



宇宿漁港に係留されている漁船（左）、漁港用地内のテトラポットの製作ヤード（右）

宇宿貝塚史跡公園

宇宿の集落を過ぎて、県道 601 号を進むと、左側に宇宿貝塚史跡公園があった。標高 13 m の砂丘台地上に位置する。

この公園は「宇宿貝塚」の発掘現場に屋根をかけて全体を建物で保存し、展示、公開する施設である。入場料 200 円を支払い、入館する。入館者は私 1 人だった。建物の管理をしている若い女性は手持無沙汰の様子で、ガイドを頼むと入念にたっぷり時間をかけて説明してくれた。彼女はけっこう派手な身なりをしており、聞くところによると島外からの移住者らしい。お土産に地元で採れたタンカンをくれた。

宇宿貝塚は 1933（昭和 8）年に人類学者の三宅宗悦（1905～1944、レイテ島で戦死）によって発見されている。その後、復帰直後の 1954～55 年にかけて河口貞徳（1909～2000）らによる発掘調査が行われ、調査が続けられたようだ。

この遺跡は、縄文時代と中世の大きく 2 つの時期のもので構成される複合遺跡であり、国の史跡に指定されている。



宇宿貝塚史跡公園の外観（左）、発掘現場がそのまま展示されている管内（右）

縄文遺跡は 2 つの層からなる。下層は縄文期、その上層は縄文末期から弥生初頭（約 3,000

年前)のもので、文様のある土器や石器類が出土している。

一方、中世の遺跡は11世紀後半から12世紀前半(平安時代後半)のもので、墓地や溝などの遺構とカムイヤキ(朝鮮半島の高麗無釉陶器の技術的系譜を引く陶質土器とされ、徳之島で11~14世紀にかけてつくられた)、滑石製石鍋、白磁、青磁などの遺物が出土している。

サトウキビと製糖工場

東海岸沿いの背後は平坦な土地が続き、そのほとんどがサトウキビ畑になっている。圃場の整備はかなり進んでいて、整然と区画整理されたサトウキビ畑が並ぶ。ちなみにこの地区の圃場整備は7~8割方終了しているとのことだ。

宇佐貝塚史跡公園からサトウキビ畑を見に行くと、ちょうどハーベスターによるサトウキビの収穫作業が行われていた。冬のこの時期はサトウキビの収穫期に当たる。作業をしている人から少し話を聞いた。

奄美大島のサトウキビの主産地はこの笠利地区で、島全体の9割を占めるそうだ。奄美市の統計によると、令和2年の農業生産額は16.48億円で、このうちサトウキビが5.21億円で最も多く、全体の31.6%を占めていた。なおサトウキビに次いで多いのが、肉用牛(子牛の繁殖)(3.76億円)、タンカン(2.05億円)である。

奄美大島に限らず、奄美群島の島々の農業主要産品はサトウキビである。主要5島のなかでは、大島は面積の割にサトウキビの生産量が低く、与論島について下から2番目である。単位面積当たりの収量は最も低い。例えば令和元/2年期の生産実績は奄美大島が4,496kg/10aに対して与論島は6,136kg/10aであり、大きな差がある。この差は島の土壌条件に起因する。隣の喜界島や沖永良部島、与論島は隆起サンゴ礁の島であることから、土壌はアルカリ性でサトウキビ栽培に適しているのに対し、奄美大島は酸性土壌でサトウキビ栽培にはあまり適していないためだという。

笠利地区にはハーベスターが17~18台ある。個人の所有ではなく共同利用しているらしい。使用料は収穫量に単価をかけているようだ。



ハーベスターによるサトウキビの収穫作業(左)、富国製糖㈱の製糖工場(右)

収穫したサトウキビはトラックに積み込まれ、西海岸にある富国製糖㈱奄美事業所に搬入され、分蜜糖に加工される。富国精糖㈱の本社は鹿児島市内にある。この製糖工場は奄美大島の財閥である有村商事㈱のグループ企業に属している。このグループは与論島にも精

糖工場を有している。

あやまる岬と歴史民俗資料館

再び県道 601 号に戻り、^{さきばる} 嶺原地区にある「あやまる岬」に行った。岬の形が綾でできた毬のようにまん丸であることからその名がついたらしい。

あやまる岬には神様が宿っているといわれており、ニライ信仰と天孫降臨神話が融合した神山的な信仰が残る岬とされている。ちなみにここは「奄美 10 景」の一つである。

この岬の周辺一帯は観光公園で、展望台、観光案内所、カフェ、海水プール、ソテツジャングル、芝スキー場、グランドゴルフ場などが整備されている。

公園の手前に奄美市歴史民俗資料館が置かれていた。旧笠利町が整備したもので、市町村合併に伴って奄美市立になった。資料館は民俗資料展示室と考古資料展示室に分かれる。民俗資料展示は、漁、衣、住、学、食、農、祭、踊、遊のキーワードで資料がまとめられていた。旧笠利町時代に同町の教育委員会が昭和 40 年代から収集してきたもので、戦前から使われていた貴重な民具類を含む。

考古資料展示室には、旧石器時代、縄文時代（喜子川遺跡、イヤンマ洞穴遺跡、宇宿高又遺跡、万屋下山田遺跡、宇宿小学校校内遺跡）、弥生時代並行期、古墳時代から古代並行期、中世、近世以降の時代区分に沿って時代解説があり、発掘された人骨、貝殻などの遺品が展示されている。笠利地区には約 100 箇所の遺跡があり、奄美群島のなかでも最も多く分布する地区のようだ。最も古いものは約 3 万年前の旧石器時代であることが確認されている。

奄美大島の歴史は、地方豪族が割拠したアジ世^あ、琉球国が統治した那覇世（中世）から薩摩藩が統治する大和世（近世）、明治維新後の近代、そして米軍占領統治のアメリカ世を経て現在に至る。

奄美の歴史において最もつらい時期は薩摩藩による統治時代の黒糖地獄だったようで、その恨みが強いせいか、サトウキビの絞り機とともに、民衆の苦しみが強調されていた。薩摩藩への年貢は当初、米であったが、製糖技術が導入されると、地形的に新田開発が困難だったこともあり、薩摩藩は徐々にサトウキビ栽培の拡大を図り、やがて年貢を全て砂糖で代納する換糖上納制度を導入した。この結果、稲作は縮小を余儀なくされ、暮らしは次第に厳しくなったという。

島民の苦境に追い打ちをかけたのが、砂糖の総買入制で、全ての砂糖を藩が吸い上げることになった。この制度は 1777（安永 6）年から 10 年間ほど導入されたが、島民の生活を圧迫する悪政だとして中止される。しかし藩の深刻な財政難を受けて再びこの制度が導入された。そして砂糖を隠れて売れば死罪、サトウキビの切株が高いと厳罰、砂糖をなめただけでもむち打ち刑になったと、展示に書かれていた。

薩摩藩の統治時代、奄美大島は笠利間切（笠利方、赤木名方）、名瀬間切（名瀬方、龍郷方）、古見間切（瀬名方、古見方）、住用間切（須垂方、住用方）、屋喜内間切（大和浜方、宇検方）、西間切（西方、実久方）、東間（東方、渡連方）の 7 つの間切（村）と 14 の方に分かれて、行政が敷かれた。そして間切を統括したのが薩摩人であり、事務は島役人が担った。島役人は、^{よひと} 与人、横目（与人の補佐）、^{てつこ} 筆子（書記）、掟（集落の管理役）などのヒエラルキーが設けられた。



あやまる岬観光公園の展望台とカフェ（左）、奄美市歴史民俗資料館の展示物（右）

笠利崎

あやまる岬を後にして、最北端の笠利崎に向かった。

続く須野という集落にある「アイリス」という中華料理兼カフェに入り、昼食に天津井とケーキを食べる。しかし内地で食べる天津井とは大きく異なっていた。カニの肉は入っておらず、卵焼きをご飯の上に乗せたような感じだった。

須野に続き、^{べる}辺留、大笠利、用の集落が続く。このうち大笠利は城前田、里前、^{かねく}金久の3区に分かれている。この地は薩摩藩が侵攻した時に初代奉行所が置かれたところで、奄美大島の行政の中心だった。こうした歴史的背景があり、太平洋岸では最も大きな集落である。2021年3月末時点の住基台帳上の世帯数は386戸であった。

集落の前には地方港湾の大笠利港が整備されているが、漁船は少ない。

太平洋岸北端の笠利崎に笠利崎灯台が立つ。日本復帰後の1962（昭和37）年に点灯した。

灯台に登る手前に「夢をかなえるカメさん」と書かれた石づくりのモニュメントが置かれていた。この海上の先に神の国・ニライカナイがあるとの伝説に基づき、最近になって観光スポットとしてつくられたようだ。「頭に触れると知恵が授かる」とか勝手なことがいろいろ書かれていた。隣には観光客向けにトイレも整備されている。

12時19分に灯台を出発して県道601号に戻り、半島を横断する峠越えのあたりの高台から笠利の集落と海を撮る。途中から県道602号に変わり、西海岸の最初の集落が^{きに}佐仁である。



笠利崎先端の笠利崎灯台（左）、最北端に位置する笠利の大きな集落（右）

佐仁と屋仁

佐仁は西海岸の最北端の集落である。1区と2区で構成され、西海岸の集落の中では比較的大きい。集落の入口に「伝統文化が残る佐仁の集落」の看板が掲げられていた。この集落では明治以降に「大島紬」がつくられていたそうだ。また「なべおてれ」という油そうめんが佐仁の伝統食らしい。この集落には佐仁小学校があり、オオゴマダラという蝶の生態調査や飼育観察の活動にも取り組んでいるようだ。

佐仁に漁港はないので、漁業は営まれていなかったのかもしれない。集落背後の谷戸地に農地があり、細々と農業をしながら、紬づくりで収入を得ていたのだろう。

佐仁から南に下ると、屋仁の集落になる。屋仁と佐仁の中間あたりに楠野という土地があったが建物が数棟あるだけで、今は廃村になっているようだ。

屋仁には地方港湾の屋仁港が整備されている。港の脇には砂浜を保全するための離岸堤が並ぶ。ただ、港内に係留されている漁船はゼロで、船外機5隻と漁船が1隻陸揚げされているだけだった。やはり漁業はあまり行われていないのだろう。

太平洋岸にはサンゴ礁が広がっているが、東シナ海側ではサンゴ礁はあまり発達しておらず、好対照をなす。

屋仁の集落の後方南側から屋仁川が蛇行して流れ込む。この川の流域は田んぼになっているが、ここで作られているのはターマン（田芋）だった。奄美群島や沖縄では里芋よりも田芋がよく食べられている。もちろん食べたことはあるが、栽培している現場を見るのは初めてであった。



佐仁集落の通り（左）、屋仁集落背後の水田で栽培されているターマン（右）

蒲生崎公園

屋仁の集落は北側が開けている。南東側に地元の人が「神山」と呼ぶ聖地があり、西側には「カモザキ」「フービラ」「ヤンチヂ」と呼ぶ大きな山が連なり、三方が山で囲まれている。西側の「カモザキ」の頂上には展望所が置かれ、蒲生崎^{がもうぎき}観光公園となっている。

集落からカモザキに登る古道はあるが、労力と時間を節約するため、大回りの車道を走り、頂上付近まで行った。

駐車場に車を停めて、「蒲生公園、展望台、蒲生神社入口」と書かれた門をくぐり、自然遊歩道を歩く。途中で蒲生神社があり、行き止まりに展望台がつくられている。展望台はRC2階建てで標高は120m、ここからは笠利湾（赤尾木、赤木名、龍郷の各支湾から構成される）を一望にできる素晴らしい景色が見られる。

案内板には、壇之浦の戦いに敗れた平家の落人が奄美大島に流れ着き、源氏の追手の船を警戒し、平有盛・行盛が遠見番を設けた場所と記されていた。笠利湾入口の東側にあたるこの蒲生崎に蒲生左衛門を、反対の西側の今井崎に今井権太夫を配置して監視し、敵の来襲に備えたそうだ。

山を下りて屋仁川沿いを南下すると川上の集落があった。人家はわずかしかない。さらに南下して赤木名の集落に達する。



蒲生崎観光公園の展望所（左）、展望所から笠利湾内を望む（右）

奄美漁協

川上集落から県道 602 号を南下、しばらくして地方港湾の赤木名港赤木名地区に着いた。港内には漁船が 8 隻係留されていた。近くにいた漁船の船主に聞くと、主にホタ（標準和名：アオダイ）を釣っているという。

この港内に奄美漁業協同組合が置かれている。同漁協は 2005（平成 17）年に笠利町、龍郷町、大和村、住用村の 4 漁協が合併して発足したものである。そして本所の所在地がこの赤木名港である。なお、旧漁協の所在地である龍郷、大和、住用の 3 ヶ所に支所が配置されている。

奄美漁協の 2020（令和）年末時点の組合員数は、正が 161 人、准が 859 人の合計 1,020 人である。合併前の 2004（平成 16）年の 4 漁協合計の正組合員数は 578 人、准は 351 人の合計 929 人であったから、正組合員数は大幅に減少し、准組合員が大幅に増えている。これは合併を契機に資格審査を厳しくしたことによるものと思われる。

2018 年漁業センサス時の経営体数は、笠利：54、龍郷：60、住用：27、大和 40 の合計 181 であった。一方、漁業就業者数は笠利：57 人、龍郷：60 人、住用：27 人、大和：40 人の合計 184 人だったので、経営体数、漁業就業者数、正組合員数はほぼ一致している。

奄美漁協の組合員が営む漁業は、釣りと潜水漁業が中心である。網漁業は少なく刺網がわずかに営まれている程度だ。釣りは瀬もの一本釣りが中心で、ホタ（アオダイ）、アカマツ（ハマダイ）、キビレアカレンコ、ホシレンコ、エラブチ（オオヒブダイ）、チカメ（チカメキントキ）、ソージ（カンパチ）、ハタ類が主要魚種である。

養殖業は民間企業によりクルマエビ養殖が、笠利地区、住用地区、大和村でそれぞれ 1 経営体によって営まれている。また龍郷町と大和村ではモズク養殖が営まれている。

2020（令和 2 年）のクルマエビ養殖を除く漁業・養殖生産は 152 トン、1.28 億円であっ

た。正組合員1人あたりの生産額は80万円ほどであり、漁業単独で生活できるレベルではない。准組合員は島の周辺にサンゴ礁が分布しているため、イノーでの電灯潜りや採貝などで自給用に水産物を採っているのだろう。

奄美大島には奄美漁協の他に、名瀬漁協、宇検村漁協、瀬戸内漁協の3漁協があるが、このうちクロマグロ養殖を中心とする魚類養殖と真珠養殖が盛んな瀬戸内漁協の生産額が圧倒的に大きく、24.84億円であった。これに次ぐのが名瀬漁協の2.12億円、宇検村漁協は0.13億円で最も少ない。ただし宇検村管内でクロマグロ養殖や真珠養殖が営まれているが、何れも本社が瀬戸内漁協に属していることから、売上金額はこちらに計上されているものと思われる。

奄美漁協の近年の漁業生産量は150トンほどなので供給量は少ない。このため産地市場はなく、漁協から島内のスーパーや鮮魚店、飲食店に直接販売するとともに、沖縄県のスーパーなどにも直接出荷している。なお、漁協では、活けメや血ぬきを徹底し、高鮮度保持を図り、付加価値の向上に努めている。



赤木名漁港に係留されていた釣り漁船（左）、奄美漁協の建物（右、漁協HPより引用）

奄美漁協から海岸線沿いに県道602号を南下すると、赤木名の集落に着いた。

赤木名は里、^{なかがねく}中金久、^{そとがねく}外金久の3つの集落の総称で、前田川河口に形成されている。旧笠利町の中では最も規模の大きな集落である。合併以前は町役場が置かれ、行政・経済の中心地であった。

集落内には奄美市笠利総合支所（旧町役場）や病院、小中学校、県立大島北高校、さらには上述した製糖工場などが置かれている。

集落の背後に琉球王朝支配時代の赤木名城跡（山城）が残る。また薩摩藩の支配下にあった時代、赤木名には奉行所が置かれていた。奉行所が名瀬に移るまでは奄美大島全体の行政の中心地でもあったのだ。このため大島仮屋跡、赤木名城跡、三井家（横目役所跡）などの史跡も多い。



奄美市笠利総合支所の建物

崎原半島

崎原半島は赤木名湾と赤尾木湾の間に突き出た小さな半島である。赤木名湾の根元に手花部の集落があり、集落の前面に干潟が広がる。湾の東側に比較的大きなクルマエビの養殖場があった。

半島の東側に前肥田の集落が海岸線に沿って点在する。家の背後の山際との間に農地を抱える家が多い。半島の中ほどに埋め立て造成された用地があり、ここに太平洋セメントの工場が置かれていた。

半島の先端から1kmほどのところで道路は半島を横断して西側に出る。こちらが赤尾木湾になる。半島の西側は先原、打田原、鯨浜の3つの地区に分かれるが、この3地区を合わせて打田原と総称している。半島の西側は東側とは異なり、岩礁が連なり、3地区の集落前面には白い砂浜が形成されている。中央の打田原には「天然の塩づくり体験場」が置かれていた。

崎原半島の付け根にあるのが喜瀬の集落である。北から浦（喜瀬3区）、里（喜瀬2区）、喜瀬（喜瀬1区）で構成される。浦地区には喜瀬漁港（第1種）が整備されている。この漁港には船外機ばかり10隻ほどが係留されていた。おそらく採貝藻漁業が中心と思われる。

漁港の近くに比較的若い漁師がいたので、話を聞いた。ちょうどマガキガイを採ってきたところだった。マガキガイは砂の中に潜っているので潜水漁で採る。この他にタカセガイやヤコウガイなどもリーフ内で採っている。潜水漁業以外では一本釣りが営まれており、ホタテ、アカマツ、カンパチ、アカジン（ハージン）などが主な魚だそうだ。



打田原の海岸（左）、喜瀬漁港に係留されている船外機（右）

リゾート地帯

喜瀬から国道58号を名瀬に向かい、赤尾木湾の地峡部を横断して太平洋岸に出る。最初の集落が用安で、土浜、節田と続く。節田から内陸部に入ったところに平の集落がある。

この一帯の太平洋岸はサンゴ礁が発達し、美しい海岸が広がる。景勝地であることから、「奄美バジャ山村」や「奄美リゾートホテルティダムーン」などのリゾートホテル、飲食店、サーフショップなどが並び、奄美大島を代表するリゾート地帯となっている。

道路沿いには「原ハブ屋」というハブの皮などを加工した製品を売る店もあり、奄美大島の一大観光地でもある。

節田の集落には「味の郷かさり」という地元産の農産物を売る店があり、産品をのぞいた。この施設は笠利地区の「ひともの交流プラザ」として位置づけられている。



リーフと砂浜が発達した太平洋岸（左）、ひともの交流プラザ「味の郷かさり」の入口（右、HPより引用）

奄美パークと田中一村記念館

用安一帯の観光ゾーンを過ぎ、節田の集落のはずれに「奄美パーク」が置かれている。鹿児島県が整備した文化施設である。上述したように、2001年9月に旧奄美空港の跡地にオープンした。奄美パークは、「奄美の郷」という総合展示ホール、田中一村記念美術館、展望台、野外ステージ、多目的広場、駐車場などで構成される。一般の駐車場は240台収容でき、バカでかい。

ここには以前来たことがあるので、2度目になる。最初に来た時には田中一村の絵に衝撃的な印象をもち、カレンダーを買った。今回は初めて展望台に上り、周囲の景色を眺めた。

奄美の郷の総合展示ホールは、海の道、シマの道、森の道、遊びの庭に分かれていて、どちらかというと子供向けの展示になっている。円型ドームの中央部にはステージが設けられ、広場ではイベントが開催できる。奄美シアターでは奄美の自然や文化に関する映像が常時、上映されている。また奄美大島の島々を紹介するコーナーもあった。

田中一村（1908～1977）は関東出身の日本画家である。幼少期から画才を発揮し、東京美術学校に進むが2ヶ月で中退し、中央画壇とは一線を画して画業を続けた。50歳の時に奄美大島に単身で移住、大島紬の染色工として生計を立てながら、絵を描いた。蓄えができたなら絵を描き、金がなくなると再び働くという生活を送り、生前は全く評価されなかった。



総合展示ホール（左）、田中一村美術館の入口（右）

清貧に甘んじ、亜熱帯の鳥や植物など、奄美の自然を独特の画風で描き、日本画の新境地を開いた人物で、後年、「日本のゴッタン」と呼ばれた。没後、NHKの「日曜美術館」

や地元の南日本新聞で紹介されると、一躍脚光を浴びることになった画家である。1977（昭和 52）年に 69 歳で、天涯孤独のままその生涯を閉じた。この美術館では、東京時代、千葉時代、奄美時代の作品約 80 点が年 4 回交替で展示されている。

伝泊ホテル

奄美パークから和野の集落を通り、再び島を横断して、東シナ海側の赤木名に向かう。この日の宿は町の中心部にある伝泊^{でんぱく}ホテルである。伝泊ホテルは地元にあった「スーパーさと」を改装してリニューアルオープンした施設だ。

1 階は「まーぐん広場・赤木名」と名付けられ、カフェ・レストランと奄美産の産品を扱う売店が入る。ただしレストランはコロナの影響で閉まっていた。まーぐん広場は観光客、集落住民、高齢者、障がい者の交流の場として位置づけられ、笠利町と赤木名集落の活性化をめざした施設である。

2 階がホテルである。客室の前が図書室になっていて、郷土関連の書籍が並び、自由に見ることができる。めぼしい本を借りて、部屋で寝ころびながら読んだ。

この伝泊は屋仁出身の建築家が起こした奄美イノベーション^株が整備したものである。同社は奄美地方の伝統的な建築物と集落、そして文化を次の時代につなげるという理念のもとで宿泊施設を展開している。ホテルはここのみだが、古民家を改修した伝泊が徳之島に 6 棟、加計呂麻島に 2 棟、笠利町内に 8 棟ある。ビラタイプのものもあるらしい。

伝泊ホテルがオープンしたのは 2016（平成 28）年なので 6 年目になる。部屋はコンパクトで機能性を重視した設計だが、最大の欠点は隣の部屋の音がよく聞こえることだ。隣には 2 人の若い女性客が泊っているようで、12 時すぎまでぺちやくちゃ喋っているのには閉口した。ここで働く人は主として島外からやってきた I ターン者で、地元の人は高齢者が多いことからパートタイマーとして勤務している。

ホテルではコロナの影響で食事の提供はない。したがって、隣にある「ガジュマルの樹の下で」という郷土色豊かな居酒屋に出かけた。夕食は、豚味噌、ウズマカツオ（ハガツオ）の刺身、アサバ（ハリセンボン）の唐揚げ、ソーメンチャンプルを注文し、奄美大島の黒糖焼酎を 2 杯飲んだ。

朝食はパン食の弁当が夜のうちに差し入れられた。サラダや果物、飲み物もついてまあまあだった。



スーパーマーケットを改装した伝泊ホテル（2階部分）（左）、部屋の前に置かれた図書室（右）

【龍郷地区】

令和5年2月19日

奄美クレーター

7時53分に伝泊ホテルを出発、8時04分に一屯のバス停を通過した。一屯半島の峠を過ぎると龍郷町に入る。

龍郷町は旧名瀬市と旧笠利町との間にあり、なぜか旧名瀬市との合併には参加しなかった。町域の総面積は81.82km²で、奄美大島の1市2町2村のなかでは最も小さい。ただ旧笠利町の60.23km²に比べると、一回り大きいことになる。

龍郷町の人口は1955（昭和30）年の8,841人がピークで、1970年には6,136人に減少したが、その後はほぼ横ばいで推移しており、2020年の国勢調査時の人口は5,817人であった。一方、世帯数は2020年が2,561戸であり、1955年の2,051戸よりも増えている。奄美大島のなかでは人口減少の少ない地区になる。

国道58号を龍郷町に入ると、赤尾木湾が開けた。この湾は奄美クレーターと呼ばれ、太古の時代に隕石が落ちてできたといわれており、直径3kmほどの円型である。海底の調査によると、隕石物質として金属の玉粒、ニッケル、鉄の破片、微細隕石質、隕石質塊などが見つかっている。

この隕石の衝突によって、笠利町側と龍郷町が陸続きになり、地峡部を形成したと考えられる。つまり衝突以前、笠利町は独立した島であったことを想像させるわけだ。

赤尾木の集落はこの地峡部に形成されている。東海岸と西海岸の距離は800mほどなので、小さな船はかつて陸上部を引っ張って渡ったとされており、太平洋側から東シナ海側に舟を渡す「舟越し」の地としての役割を担っていたらしい。集落は波静かな赤尾木湾沿いに形成されており、集落の前面には砂浜が続く。背後は農地になっており、太平洋岸に家はない。

この集落からはウフタ遺跡が発見されている。1995（平成7）年9月に農道の工事中に発見されてもので、約2,000年前の遺跡と推定されている。砂丘の地表から10mほど掘り下げた層から土器、石器、貝製品、獣骨、魚骨などが出土した。また奄美諸島・琉球諸島でこれまで見られたことがない石積みの竪穴住居跡も発見されている。



隕石の衝突の跡と推定される赤尾木湾（左）（HPより引用）、波静かな赤尾木湾（右）

芦徳

赤尾木湾の東海岸沿いに芦徳の集落が形成されている。龍郷町も旧笠利町と同じく集落

への思いが強いようで、各集落の中心部に「わきゃシマの宝〇〇集落」という看板が集落ごとに掲示されていた。

赤尾木との境あたりに地方港湾の芦徳港が整備されている。港内には漁船4隻と船外機8隻が係留されており、船外機11隻ほどが陸置きされていた。集落の案内によれば穏やかな湾に面している特徴を活かしてモズクやクルマエビ、真珠などの養殖が盛んだったが、近年はホテル・ダイビング業が進出し、別荘などが立ち並び、リゾート地に変貌しているという。このため他の集落と比較すると内地からのIターン者の割合が多く、通勤族などを含めると他市町村の出身者が約1割を占めるようになっているらしい。

この日が日曜日だったからだろうか、朝から集落の人が出て、清掃活動に励んでいた。芦徳漁港を中心とする海岸線一帯にはリゾートホテルや飲食店が見られる。

小さな半島を回った先が龍郷湾になる。本茶峠^{ほんちや}の道路沿いには緋寒桜が植えられており、ちょうど満開だった。緋寒桜は伊豆の河津桜よりも早く咲き、日本で最初に咲く品種で、奄美群島から沖縄にかけて分布している。湾の西側、つまり同湾の東側にはほとんど人家はなく静かである。湾奥に向かう途中で円筒状のセメント貯蔵施設が3基とセメント輸送船のバースが整備されており、貨物船が1隻係留されていた。

半島を一周する道路と国道58号が交わるあたりに、奄美大島を代表する郷土料理・「鶏飯」の専門店・「ひさ倉」があった。この店が位置するのが屋入^{やんゆ}の集落である。もともと、浦、瀬留、龍郷の各集落の耕作地であったが、150年ほど前から人が移り住むようになったといわれている。



芦徳漁港（左）、本茶峠の緋寒桜の並木（右）

黒糖焼酎

国道から半島に出る道の手前に奄美大島酒造(株)の工場と売店があった。尿意をもよしたのでトイレを借りる。工場見学もできるが朝早かったため、まだ受付が始まっていなかった。この会社のメインブランドは「浜千鳥乃詩」である。

焼酎は米、麦、芋などからつくられるが、黒糖を原料にした焼酎は奄美群島固有のものだ。国税庁は離島振興の観点から黒糖焼酎の醸造を奄美群島のみ認めている。

サトウキビを原料とする蒸留酒にはラム酒が知られているが、黒糖焼酎は固形の黒糖と米麴からつくられるのに対しラム酒の原料は主としてサトウキビの絞り汁か廃蜜糖が用いられている点で異なる。また黒糖焼酎のアルコール度数は45度以下なのに対し、ラム酒は

95 度以下のリキュールに分類されている。

ところで江戸時代まで黒糖は全て薩摩藩が年貢として徴収していたから、黒糖を原料として焼酎がつくられるようになるのは明治以降のことで、沖縄の泡盛や鹿児島島の芋焼酎などに比べると、比較的新しい焼酎といえる。当初は自家製造であったが、その後販売を目的とする醸造が始まった。しかし戦争によって黒糖焼酎の生産は中断する。今日のような商業的生産が本格するのは、奄美群島が日本に復帰した 1953 (昭和 28) 年以降のことであった。

奄美大島には、龍郷町にこの奄美大島酒造(株)と町田酒造(株)、(有)山田酒造の 3 社、奄美市に合資会社弥生焼酎醸造所、渡酒造(株)、(有)富田酒造、西平良酒造(株)、(株)西平本家の 5 社、宇検村に(株)奄美大島開運酒造、以上合わせて 9 社の蔵元がある。なお奄美群島内では奄美大島の他に喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島で黒糖焼酎がつくられており、奄美群島全体の蔵元は 16 社 23 に及ぶ。何れも各島でつくられた黒糖を原料としている。2020 酒造年度 (20 年 7 月～21 年 6 月) における奄美群島全体の課税出荷量は 7,082kl で、生産額は約 70 億円であった。



国道脇にある奄美大島酒造(株)の工場

浦

龍郷湾の湾奥に位置し、東シナ海側から南に連なる長雲山系と太平洋岸から続くジョウゴ山系に挟まれた扇状地に形成された集落が浦である。

ここには龍郷町の庁舎が建ち、龍南中学校、中央公民館、保健福祉センター、体育文化センターなどの公共施設、医療機関、金融機関が集積し、町の行政、経済、教育の中心地となっている。もともと浦集落の北側の瀬留^{せどめ}に役場が置かれていたが、1965 (昭和 40) 年に浦に移転したことを契機として人口が増加、今や龍郷町の中心地だ。ちなみに 1975 (昭和 50) 年に町制が敷かれ、龍郷村から龍郷町になった。

浦から谷戸沿いを国道 58 号が名瀬に向けて伸びているが、この道路沿いの内陸部に川内、大勝、中里の集落がある。龍郷町の集落はこの 3 つを除くと全て海に面している。なお龍郷町のうち太平側にあるのは、中勝の集落から県道 611 号を南下した海沿いに形成された戸口集落と赤尾木に隣接する屋入と毛広^{ねぼろ かしげん}の 2 集落だけで、残りの集落は全て東シナ海側に位置する。

瀬留・玉里

瀬留^{せどめ}の集落は以前、瀬花留部^{せけるべ}、瀬留部^{せりぶ}と呼ばれていたが、郵便の誤送や集落名の誤記などがあったことから、1919 (大正 8) 年に「瀬留」に改称された。もともと村役場が置かれており、天然の良港である龍郷湾を抱えていたことから、交通、経済、教育の中心地であった。

瀬留の沖の海岸線は 1977 (昭和 52) 年から 2 ヶ年かけて埋め立てられ、そこに九州電力の龍郷発電所や公営住宅などが建つ。市街地が北に拡大したことから、1992 (平成 4) 年に玉里が分離して新たな集落となった。

瀬留の集落の北端に「カキ (垣) 漁跡」が残る。干潟域に石を積んで囲ったもので、満潮

時に石垣の中に入った魚類等が干潮時に取り残される仕掛けだ。これを手づかみで採捕する漁業である。南の島々から沖縄にかけてこの種の漁業は盛んだった。

瀬留の集落には、後述する瀬留カトリック教会の他に、薩摩藩が 1865（慶応元）年に整備した白糖工場跡が残る。この工場はアイルランド人の技師を招き、奄美大島島内の 4ヶ所（他に旧名瀬市、宇検村、瀬戸内町）に建てられたが、原料や燃料不足、社会情勢の変化により 1年で中止になっている。



九州電力龍郷発電所の全景（左）、カキ（垣）漁の跡地（右）

瀬留カトリック教会

瀬留集落の中心部付近に瀬留カトリック教会がある。奄美大島で最も古い教会だ。1908（明治 41）年に建てられた教会聖堂と司祭館（1932 年建設）は国登録有形文化財に指定されている。また教会の敷地内には、教会聖堂を建設し 19 年にわたって司教活動を行い地元で生涯を閉じたブイジュ師像と、同師の碑文が置かれている。

明治維新後の 1873（明治 6）年にキリシタン禁制が撤廃されると、多くの宣教師が来日し、布教活動に力を入れるようになった。現在、奄美大島には全部で 30 の教会があり、五島列島と並んで特異的に多い。なぜこのように奄美大島にキリスト教が普及したのだろうか。

奄美大島の宗教は時の政権が深く関与している。琉球王朝が支配していた時期はノロによる祭祀、薩摩藩の統治時代になると寺や神社が普及する。しかし本土に比べると寺は少なく、檀家制度もなかったので、いわば白紙の地にキリスト教の布教活動が展開されることになり、明治期に急速に広まったものと考えられる。つまりキリスト教を受け入れる社会的基盤にあったのだろう。

奄美大島にカトリック布教のために宣教師が訪れたのは、1891（明治 24）年のことであった。来島の理由について、「瀬留カトリック教会献堂 100 周年誌」は次のように記しており、奄美大島の歴史的成り立ちが関係しているようだ。

「島の有識者の方々の中に薩摩藩の圧政に長く苦しめられ、自ら振興できない奄美に精神的な息吹を与える事が必要だと感じ、鹿児島キリスト教区に奄美伝道のお願いをした」

このように地元から求められて来島したことになっているが、もともと日本にキリスト教を普及するためにやってきたのだからこの記載は建前であろう。奄美大島に来た最初の宣教師は長崎区パリ外国宣教会のヨゼス・ベルナール・フェリエであった。

キリスト教は奄美大島の北部（笠利、龍郷、名護）を中心に信者を増やし、2,000人ほどに増加、司祭の数も常時7～8人が赴任していたらしい。1903（明治36）年にブイジュ師が瀬留に着任し、教会の建設に着手。上述したように1908（明治41）年に落成している。その後さらに信者を増やし、1927（昭和2）年の信者は4,000人に達している。なおブイジュ師は1922（大正11）年に亡くなり、地元の墓に葬られている。

しかし、戦前、戦中には神父は追放され、瀬留教会は青年学校として活用されたが、戦後の米軍支配下において1947（昭和22）年に復活している。

この瀬留教会を母教会として、瀬留小教区には、赤尾木、秋名、安木屋場、嘉渡、龍郷、大勝の6つの教会があり、2009年時点の信者総数は430人であった。現在、奄美大島北部には全部で20ほどの教会が配置され、偏在している。

「ノロ」の島・奄美大島に、これほどキリスト教が根付いていることは今回の島旅で初めて知った次第だ。ちなみに瀬留教会落成100年を記念して上述した記念誌が発刊され、盛大な祝賀会が催されている。



瀬留カトリック教会の建物（左）、教会内に置かれているブイジュ師像と同師記念事業碑文（右）

久場

瀬留の隣の集落が久場である。県道81号から少し奥まった位置に久場の集落が形成されている。集落を過ぎた北側に龍郷漁港（第1種）番屋地区がある。阿丹崎と呼ばれる小さな半島部の付け根付近にあたる。ここは、1859（安政6）年に潜居を命じられた西郷隆盛が上陸した場所である。西郷、33歳の時であった。西郷が乗ってきた船のとも綱を結び付けたと伝えられる松の木は「西郷松」と呼ばれた。その後松くい虫の害を受けて枯れ、2011（平成23）年に伐採されているが、名前だけは残っている。

この松のあった場所の前に茶屋があった。「観光土産・しいの実せんべい」と書かれた看板が立ち、店内では古代伝来のキビ（タイケイ種）を絞ったきびジュースや「手づくりこだわり」と銘打った黒糖・「じいちゅんが」が売られていた。

龍郷漁港・番屋地区の漁港用地内には、奄美漁協龍郷支所の事務所や荷捌き場、製氷施設が置かれている。支所の職員は1名である。また漁港内には5トン未満の漁船が7～8隻ほど係留されていた。加えて陸揚げされている漁船が2隻あり、うち1隻は塗装中だった。船を見に来た漁師がいたので少し話を聞いた。

龍郷地区は漁師の後継ぎが少なく、高齢化が進んでいるが、笠利地区は対照的に若い漁師

が結構おり、移住者が多いそうだ。この地区の漁業は一本釣りが中心で、水深 200～350m の深場が漁場だという。ただ魚種によって水深は異なり、ホタテは 200m 付近、アカマツ（チビキ）は 350m 付近がタナになる。このように一本釣りを基本としているが、漁模様がよければ、曳釣でカツオなどを獲る。しかし近年めっきり魚がいなくなっているらしい。その原因は、GPS が普及して漁場へ向かうのが効率的になったことにより獲りすぎているとの分析だ。なお、龍郷湾では一部海域でモズク養殖が行われている。漁獲物は名瀬漁協の産地市場と笠利地区の奄美漁協本所に出荷しており、車両で運搬している。



LPガスボンベの基地内に自生するサキシマスオウノキ（左）、西郷南洲上陸地におかれている茶屋（右）

漁港のさらに北側に有村商事㈱のオイルタンクやLPGタンクが並んでいた。この敷地内にサキシマスオウノキが自生しており、町の天然記念物に指定されている。この木はもともと亜熱帯域に分布する高木で、奄美大島が北限にあたる。根が板根状になることで知られている。西表島にはこの木の群生地があり、私はこの1月に現地で見ている。

龍郷

久場からさらに北上した次の集落が龍郷である。海と山麓の間の狭い平地に帯状に家が連なる。集落手前の県道 81 号沿いに笹森儀助の顕彰碑と「島のブルース」の歌碑が置かれていた。

笹森儀助（1845～1915）はトカラ列島の文献にも多く登場するので、民俗学への造詣の深い人物として承知していたし尊敬もしていた。ただ、奄美大島の島司をしていた人物とは知らなかった。笹森は千島列島探検、沖縄本島から与那国島までの「南嶋探検」など当時としてはチャレンジングな探検家であった。その後、1894（明治 27）年に奄美大島の島司に就任する。島司時代にトカラ列島の調査も実施していたのである。その後、第 2 代青森市長になった。つまり、探検家であると同時に行政マンであり、政治家でもあったのだ。笹森は民俗学者の鳥居龍蔵や柳田國男に多大な影響を与えた人物であり、奄美大島の島司であった縁でこの地に顕彰碑が建ったのだろう。

「島のブルース」の歌碑は渡久地政信（1916～1998）を顕彰したものである。この歌は奄美大島をテーマにしたご当地ソングだ。「三沢あけみと和田弘とマヒナスターズ」が歌ったのでよく知っている。ただし作曲者の渡久地政信は知らなかった。ネットで調べると、渡久地は沖縄本島の恩納村に生まれ、幼少期を龍郷で過ごしている。その縁でここに石碑が建ったのだろう。戦後まもなく発売され、「船をみつめていた・・・」で始まる「上海帰りのり

ル」も、春日八郎が歌った「お富さん」も懐かしい曲だが、彼が作曲したものだった。

集落の中心部あたりに龍郷漁港（第1種）龍郷地区が整備されている。漁港には船外機5隻あるのみで、この集落ではほとんど漁業は営まれていないようだ。

集落の中ほどに「田畑家歴代の墓地」と書かれた一画があった。門の入口には「この弁財天の墓地は土地台帳に登録されている私の所有地で共同墓地ではありません。昔から当家の男系のもだけが利用するしきたりになっております。当家から他家に嫁入りした方とその子孫ならびに当家と血縁関係のない他人の埋葬は堅くお断りします。昭和49年2月墓地所有者 田畑為正」と書かれていた。

田畑家のルーツは琉球国の支配を受けていた当時、王命により奄美大島の一部地域の統治を任されていた笠利氏である。薩摩藩が侵攻した江戸期、田畑佐文仁（1676～1764）はサトウキビ増産のために約500haに及ぶ新田を開発、水車を利用した製糖法も導入し、「奄美開拓の父」を呼ばれた。薩摩藩の島津家はこうして功績に対して「田畑」姓を与えた。ところが第8代藩主・島津重豪が「一文字姓」への改姓政策を導入したことに伴い、「龍」と改姓したのである。西郷隆盛がこの地に滞在した時に島妻となった愛加那は龍家の分家筋の娘であった。そして明治時代になって再び田畑に復姓したのである。

それにしてもこの警告文は異常である。この墓地に田畑家に断りなく埋葬した人がいなければわざわざ警告を発する必要はないはずだからだ。



笹森儀助島司の顕彰碑（左）、田畑家歴代の墓地（右）

西郷南洲流謫地跡

西郷隆盛の庇護者であった島津斉彬が亡くなると、井伊直弼は安政の大獄によって弾圧を強める。西郷と尊王攘夷派の月照は幕府から追われる身になる。2人は幕府の追及を逃れるため薩摩に逃亡、錦江湾で入水自殺を図るが、西郷だけは奇跡的に助かる。薩摩藩は幕府の追及を逃れるため死んだことにして、西郷を奄美大島の龍郷に潜居させた。

龍郷集落の中心部付近にこの西郷南洲流謫地跡がある。この敷地は龍家の所有地で、同家の管理人が来るまで入れない。10時まで付近を散策して時間をつぶし、入館料200円を支払って敷地内と家の中を見学する。この建物は西郷の島妻・愛加那と息子・菊次郎のために建てた新居で、1861（文久元）年11月20日に完成している。その後、1910（明治43）年に再建されたものだ。したがって西郷が実際に住んだ家ではない。屋根は茅葺で、かなり傷んでいる。今では茅葺職人もほとんどいなくなっているため、維持が大変だろう。

屋敷の入口には勝海舟が送った碑文を刻んだ石碑が建つ。この石碑は一度倒れたことが

あるようで、上部にひびが入っている。見学者は私を含めて5～6人だったが、管理人は熱心に説明してくれた。

上述したように「龍」という一文字の姓は奄美に特有のものである。薩摩藩は奄美群島の支配を江戸幕府に対して隠さなければならなかったため、奄美群島の島役人の姿、服装、苗字などは薩摩藩とは違ったもの、つまり琉球王国風にしななければならなかった。そのため苗字は2文字を禁止し、一文字に改姓させた。なお苗字は、砂糖の献上や田畑開墾などの功績にあった家に与えられた。

1859（安政6）年1月、西郷は上述した阿丹崎に着き、潜伏生活が始まる。龍郷に滞在中は3度家を替えたようで、この家は奄美を去る前の2ヶ月間だけ住んだようだ。西郷が奄美大島潜伏中の給与は24石（150kg／石）だった。島妻の愛加那との間には1男1女がいる。長男の菊次郎は9歳の時に薩摩に行き、米国留学後、外交官として活躍、台湾の宜蘭庁の長官や京都市長を務めた。長女は14歳の時に薩摩に行き、19歳で大山元帥のところへ嫁いだ。島妻の愛加奈は島を離れることなく、1902（明治35）年に脳溢血のため畑で倒れて死亡した。66歳であった。

西郷は1862（文久2）年1月に家族を残して龍郷を去り、薩摩に戻る。その後、西郷は沖永良部島に流罪になるが、奄美大島での3年間は流罪ではなく潜伏であった。



西郷南洲が潜伏した時に住んだ家（左）、家の内部（右）

龍郷の集落を離れて北上した位置に地方港湾の龍郷港浦郷港が整備されていた。港には砂や石が野積みになっている。この港は建設資材を受け入れているようだ。

安木屋場

龍郷湾側から安木屋場あんきやばトンネルを抜けて東シナ海側に出た最初の集落が、安木屋場である。海と山裾の間に人家が並ぶ。小規模な集落だ。安木屋場はもともと網小屋場が置かれていた場所で、家は数軒しかなかった。龍郷集落の一部であったのだが、1963（昭和38）年に分離して安木屋場となった。網が置かれていた場所が訛って「あんきやば」に変化し、現在の文字が当てはめられたといわれている。

集落の前には安木屋場漁港（第1種）が整備されている。しかし、船外機が1隻係留されているだけで、この他に陸置きの船外機が1隻のみあるだけだった。したがって現在では漁業はほとんど営まれていないだろう。

龍郷湾の先端が今井崎で灯台がたつ。対岸が蒲生崎である。上述したように今井崎には今

井権太夫を配置して、源氏の来襲に備えたといわれている。

県道 81 号を海岸沿いに西に向かうと、ソテツの群落が見られた。またその先にはイトバショウの群落も見られる。

このソテツの群落は自生ではなく、大和村から移植されたものとされている。奄美大島ではソテツは救荒食物として重要であったから、山の斜面の土留めを兼ねて段々畑にソテツが植えられた。一方のイトバショウは幹の芯が飢饉の時の食料となり、外皮は芭蕉布の原料になった。しかし、豊かになった今日の日本ではソテツが救荒食として利用されることはないし、芭蕉布の生産もわずかなものにすぎない。



安木屋場のソテツの群落（左）、イトバショウの群落（右）

東シナ海側の集落

東シナ海に面する国道 81 号を西に向けて走る。安木屋場の次の集落が円である。円の集落は円本川の谷戸地に固まっている。集落から少し離れたところに地方港湾の円港が整備されているが、漁船は 1 隻も係留されておらず、船外機が 4 隻陸揚げされているだけだった。冬季の北西風をまともに受ける位置にあるから、高い防波堤がつくられている。この円の集落にはかつて沖縄県糸満の漁師が季節的に移住して漁をしていたようだ。

続く集落が嘉渡である。こちらも嘉渡川の河口域に形成された集落である。大島紬の「龍郷柄」（大島紬の柄は地域によって特徴があり、代表的な柄は、龍郷柄、秋名バラ、西郷柄、有馬柄、亀甲柄など）の発祥の地とされており、この集落では大島紬の生産が盛んであった。大島紬は奄美大島の重要な地場産業である。生産のピークは 1980（昭和 55）年の 267,565 反、生産額は約 286 億円であった。しかし着物離れが進むとともに生産は衰退。本場奄美大島紬協同組合の統計によると、令和 2 年は 3,385 反、2.9 億円で縮小している。主要な産地は旧名瀬市と龍郷町で、旧笠利町でも少し生産されている。

集落の前面に秋名漁港・嘉渡地区（第 1 種）がある。しかし漁港内には船外機が 1 隻係留され、斜路にやはり船外機が 1 隻陸揚げされているだけだった。したがってこの集落では漁業はほとんど営まれていないことを示していよう。集落の海側に比較的大きな墓地がまとまっている。宇検村のほとんどの集落は管理する人がいなくなったことから墓地を廃止し、1ヶ所にまとめた共同墓地となっているが、龍郷町ではそこまで至っていないようだ。

秋名トンネルを抜けると、秋名と幾里の集落になる。秋名川の河口に発達した集落で、川の左岸が秋名、右岸が幾里になる。秋名川の流域は比較的広い沖積平野が広がっており、米の他に田芋やマコモダケが栽培されていた。国内でマコモダケのまとまった圃場をみるの

は初めてである。

集落の前に秋名漁港・秋名地区（第1種）が整備されている。ただし船外機が2隻だけだった。漁港内に砂が堆積しているようで浚渫作業にあたる専用船が停泊していた。秋名と幾里の集落は農業が主体で、漁業はほとんど営まれていない。この集落にも川に面して墓地があった。一方、瀬留から秋名に至る7つの集落には、上述したように教会が置かれている。



嘉渡の集落入口に立つ大島紬龍郷柄発祥の地の看板（左）、秋名川沿いのマコモダケの畑（右）

【名瀬上方地区・市街地】

県道 81 号をさらに進み、11 時 54 分に奄美市に入った。旧名瀬市の集落は、①名瀬港背後の市街地、②名瀬港東部の上方地区、③同西部の下方地区、そして④太平洋岸に面する古見方地区の4地区に区分されている。

令和3年3月末時点における旧名瀬市の住基台帳上の人口は35,299人だったが、このうち市街地の人口は19,343人で、約65%が市街地に集中していることになる。ちなみに名瀬地区（旧名瀬市）の人口のピークは1985（昭和60）年の49,765人（17,127戸）であったから、当時と比べると、30%ほど減少している。

芦花部

東シナ海側の県道 81 号を旧名瀬市内に入った最初の集落が芦花部である。龍郷町との境にある芦花部トンネルを抜けると、100 戸ほどの家が県道の両側に並んでいた。

県道を下って海に出た。ちょうどその角あたりに栽培漁業センターらしきものがあった。看板が出ていないのでこの施設がわからないが、兎に角、利用されているようだ。ただ人は見当たらない。施設もあまり手入れが行き届いている様子は見られない。後に名瀬漁協で聞いたところでは、この施設はマルハ系の子会社が魚類種苗センターとして整備、その後、業績不振に陥り、㈱拓洋が買収したとのことだ。現在はマグロとマダイの種苗を生産し、宇検村にある同社の養殖場に供給しているとのことだった。

㈱拓洋の種苗生産施設の西側の谷に面した集落が有良で、わずか37戸の小さな集落である。周囲は深い原生林に包まれている。ここから坂を登り、峠を越えた先に奄美大島で唯一のゴルフ場、奄美カントリークラブ（18ホール）がある。ゴルフ場のはずれには風車が1台立っていた。

ゴルフ場の西側には陸上自衛隊西部方面隊の奄美駐屯地が置かれている。中国の軍事的

脅威に対し日本の離島防衛態勢強化のために、2019（平成 31）年 3 月 26 日に開設されたものだ。なお有良から大熊に抜ける道路は 1963（昭和 38）年に陸上自衛隊第 8 師団内施設大隊が施行したと書かれた記念碑が名瀬湾を見晴らす場所に置かれていた。日本復帰もないころだから、島内に未だ土建業者が育っていなかったのだろう。

高台から名瀬港を写真撮影。急こう配の坂を下った先が名瀬湾の一角を構成する大熊の集落である。



㈱拓洋の種苗生産施設（左）、陸上自衛隊奄美駐屯地（右）

大熊漁港

大熊は名瀬港の入口の相当する名瀬湾東部の河口域に形成された集落である。もともと名瀬湾の支湾だったところを埋め立てて平坦な土地を造成、土地区画整理事業によって住宅を再編した。川を挟んで南側が佐大熊の集落になる。

集落の前には大熊漁港（第 4 種）が整備されている。汽船が普及する以前の帆船時代から利用されてきた港だ。

漁港用地に漁業生産組合宝勢丸の加工場兼売店が置かれていた。早速、建物の中に入る。ここではカツオの刺身が一皿 500 円で売られていた。地元の人々がひっきりなしに店に入っていくので、かなり繁盛している様子だ。鰹節やなまり節、削り節などのカツオ加工品が売られている。ここでなまり節を一本購入した。

宝勢丸は現在奄美大島に唯一残るカツオ一本釣漁船である。かつては島内各地にカツオ釣り漁船があったが、現在は宝勢丸だけになってしまった。

この大熊地区でカツオ一本釣漁業が始まったのは 1901（明治 34）年のことであった。宝勢丸カツオ組合が設立されたのは 1922（大正 11）年で、すでに 100 年の歴史を有している。当初の組合員は 22 人であった。この組合は平等出資、平等就労、均等配分の 3 原則を掲げて発足した。創業以来組合員はほとんどが世襲である。早くから今日でいうところの 6 次産業化を目指しており、1956（昭和 31）年には鰹節と刺身の加工場を整備し、1959（昭和 34）年に、宝勢丸鰹漁業生産組合として法人化されている。現在の施設は 2005（平成 17 年）にオープンしたものだ。漁船は第 8 清丸（14 トン）である。なお宝勢丸生産組合は奄美漁協の正組合員になっている。

宝勢丸は、自営船で漁獲したカツオやキハダの節加工と刺身加工を手がけ、漁獲、加工、販売を一貫して行う経営スタイルにいち早く取り組んできたわけだが、最近は飲食店経営

(鰹の家 house i)、加工残渣を使った堆肥作り、キハダの蓄養生簀での一本釣り体験や魚さばき体験などにも取り組むなど、積極的な事業を展開している。

漁港には比較的大きな浮棧橋が設置され、5トン以上の漁船が10隻以上係留されていた。まさに奄美大島の漁業拠点となっている。またディンギー型のヨットも10隻ほど置かれていた。



宝勢丸鰹漁業生産組合の加工場兼売店（左）、冷蔵ショーケースに並べられたカツオの刺身（右）

奄美市立奄美博物館

大熊から山^{やぎしま}羊島トンネルを抜け、名瀬湾を一周して、湾口部の長浜地区（大熊の対岸）にある奄美市立奄美博物館に行った。

一万人広場の一角に奄美振興会館（奄美川商ホール）が整備され、広場や博物館を含めて奄美文化センターと総称されている。会館はいわゆる文化センターに相当する施設で、1,438席を有するホール、リハーサル室、練習室、会議室、ギャラリー、ロビーなどを備える。1987（昭和62）年3月に竣工しており、博物館と合わせ、奄美大島あるいは奄美群島を代表する文化拠点となっている。

この文化センターは奄美大島に見られるシマ（集落）の骨格を再現することを基本コンセプトとして設計されたらしい。つまりセンターの北に海の彼方から来た神々が立ち寄る立神があり、人々が集い優れた芸術・文化を鑑賞し、地域文化の活性化を図るための奄美振興会館を島の「アシャゲ」、地域の歴史・文化・自然遺産を鑑賞する奄美博物館を「トネヤ」（ノロが住んだ屋敷）、一万人広場の「ミヤー」、奄美文化センターから中心市街地にまっすぐ伸びて「おがみ山」に向かっている道を「神道」としている。

博物館は1987（昭和62）年に「名瀬市立奄美歴史民俗資料館」として開館した奄美群島唯一の総合博物館が母体である。奄美市の誕生に伴い奄美市立奄美博物館と名称を変更、さらに2019（令和元）年に展示内容を一新してリニューアルオープンした。建物は3階建てで、各フロアはテーマ別に分かれている。

1階の展示室は「黒潮に生まれた奄美」がテーマで、奄美群島を紹介する導入部にあたり、奄美の舟と漁業、ウミガメなどの海洋生物が扱われている。

2階のテーマは「境界の歴史に生まれた奄美」で、奄美の歴史や名越佐源太の南島雑話の世界を紹介、奄美の食、奄美の信仰、シマの空間構造、ノロ祭記、奄美の支配などがパネル展示され、民具も多数展示されていた。

3階は「亜熱帯雨林に育まれた奄美」がテーマで、奄美の森や自然、文化、昔話、サンゴ礁の海の恵みなどが紹介されている。



奄美市立奄美博物館の外観（左）、奄美の舟の展示（右）

【大和地区】

大和村は奄美大島の北西部に位置する東西に細長いエリアで、東シナ海側に面している。大和村の南東に奄美大島の最高峰である湯湾岳（標高 694m）が宇検村との村境にそびえる。面積は 88.26 km² で、龍郷町より少しだけ大きい。ただし村の 97% 近くを森林が占めており、農地は 113ha しかなく、そのほぼ全てが畑地である。米はほとんど穫れず、農業は果樹栽培が中心で、主にスモモとタンカンがつけられている。

大和村の 1955（昭和 30）年の人口は 5,528 人で、世帯数は 1,226 人であった。その後、人口は減少の一途をたどり、2020（令和 2）年国勢調査時の人口は 1,364 人、世帯数は 668 戸になり、この間に人口は 1/4、世帯数は 1/2 に減少している。高齢化率は 40% を超えており、少子高齢化が進む典型的な地区になる。村内は 11 の集落で構成されるが、全ての集落が海に面している。大和地区の場合も、笠利や龍郷の両地区と同様、自らの集落に対する意識が高く、各集落の中心部にはシマ（集落）を紹介する看板が掲げられている。

地区内を巡る公共交通はバスのみで、名瀬の県立病院前から大和村西端の今里まで運行されている。平日は 1 日 5 便、土日祝は 1 日 3 便で、病院通いの独居老人の大切な足となっている。名瀬から今里までの所要時間は約 1 時間 10 分だ。

今里

名瀬の市街地から大和村の最西端の集落である今里に向けて県道 79 号を走る。昼食時間を過ぎていたので食堂に入ろうと探したが見あたらず、途中の八芳園という少々きたない店でラーメンを食べた。この店に日本最大の医療法人を築きあげた徳洲会の創始者である徳田虎雄氏の色紙が貼ってあった。「馬鹿にされたくない!! 弱きを助け悪しきをくじく」と書かれていた。徳之島出身の徳田氏の苦労と信念が現れている。また店主とペルーのフジモリ元大統領とのツーショットの写真も飾ってあった。徳田氏はもとの選挙地盤であったからわかるが、フジモリ元大統領とはどのような関係にあったのだろうか。

大和村の東から西までの道路延長は約 25 km なので、昼食時間を含め 1 時間ほどで村はずれの今里に着いた。

今里の集落は大和村の西端にあり、海岸にへばりつくように集落が形成されている。県道 79 号をそのまま進むと山中に入り、つづら折りの細い山道を下った先が宇検村である。

集落の西側に今里漁港（第 1 種）が整備されている。海が荒れていたせいか、漁港内に係留されている漁船はなく、船外機 4 隻、漁船 2 隻が陸揚げされているだけだった。

近くに「今里鰹漁業記念之碑」が立つ。この今里の集落は大和村におけるカツオ釣り漁業の発祥の地だった。1901（明治 34）年に鰹漁業組合を結成、宮崎県の南郷からカツオ釣り漁船を購入して、カツオ一本釣り漁業が始まった。以来順調に発展し、多い時には 7 隻のカツオ漁船を数えたといわれる。自給自足的な生活に現金収入をもたらし、今里の集落の生計を支えたのがこのカツオ釣りだったのであろう。

今里の集落には小学校がある。近くを通りかかった人に聞くと、在校生は 4 人とのことだ。校舎の脇に立派な体育館が建つ。また公民館の前には土俵が置かれている。奄美は相撲が盛んな土地であるが、このように集落単位で土俵があるのは、瀬戸内町と宇検村、そして大和村の東部に限られている。また海に面した家には石垣が高く積まれている。比較的薄く、かつ平板状の石で、対馬の石屋根などの材料になっている石と類似する。

今里を起点に国道 79 号を東に向けて走る。今里隧道を出ると、志戸勘の集落になった。ただし、ここは数戸住むだけの限界集落である。



今里の集落（左）、今里漁港（右）

名音と戸円

志戸勘の集落を通過し、志戸勘トンネル（486m）、長瀬トンネル（1,432m、2004 年 10 月竣工）を抜けると名音な おんの集落になる。集落は名音川の右岸に形成されており、背後は急峻な山に囲まれている。大瀬以西の集落のなかでは最も大きい。名音の集落には 1867（明治 12）年創立の名音小学校があり、現在、19 名が在籍している。

集落の前には名音漁港（第 1 種）が整備されている。漁港には 4 隻の漁船が係留され、1 隻が陸揚げされていた。何れも船外機で、サンゴ礁域での潜水漁業を中心に営んでいると思われる。

集落を過ぎて、名音トンネルを抜けた先に「徳浜の断崖」と呼ばれる垂直の崖がそそり立つ。高さは 172m あり、鎌倉時代の大地震で形成されたとされる断層である。この地層は約 5 億年前のもので、チャートで構成される。この断崖をくり抜いて名音トンネル（全長 386 m）が 1968（昭和 43）年に完成している。トンネルができる以前は、名音、志戸勘、今里

の3集落は「陸の孤島」と呼ばれていた。この3つの集落に行くには、山越えをするか、船を利用しなければならなかったのである。

断崖を過ぎた岬のたもとに老人ホームがあった。この先は比較的長い砂浜が続き、「ヒエン浜」と呼ばれている。サーファーがよくこの浜を利用するようだ。形成された砂丘からは古墳時代から平安時代にかけての遺跡が見つかっている。

次の集落が戸円である。三方を山に囲まれ、山の麓にへばりつくように形成されている。集落の前面は海だが、この集落には港はない。集落の北側に小学校があったが、すでに2013（平成25）年3月で閉校となっている。大和村はインフィニティ国際学院と包括連携協定を締結しており、戸円小学校の旧校舎の一部をアート実習の場として提供されているようだ。訪問した時はちょうど、校舎の一部を解体する工事が行われていた。



名音漁港（左）、徳浜の断崖（右）

大金久と大棚

戸円をすぎると山中に入り、海から遠ざかる。しばらく集落はない。海岸線は断崖絶壁が続き、県道79号は高いところを走る。岬の先端に嶺山公園が整備され、トイレがあったので用を足す。

坂を下る途中に「おおがねく大金久ふれあいパーク」と呼ばれる展望所があり、ここに「大東亜戦争大金久出身者戦没者」の石碑が海と集落を見渡す場所に立っていた。14名の戦没者の氏名、戦死年月日、戦没地が刻まれ、戦死地はブーゲンビル島、硫黄島、ビルマ、ルソン島、中支など広範囲に及ぶ。

ここから坂を下った先が大金久の集落である。集落は海と背後の山に挟まれた猫の額ほどの土地に細長く形成されている。この集落にも漁港はない。

途中にヤキ牧場があった。ちょうど救急車が通過した。都会と違って離島のしかも外れの集落で、急患が発生した場合は、病院まで時間が掛かるから大変だろうと思う。

集落の入口に大金久トウルス公園があり、ここから大金久のシンボルであるトウルス岩が見える。この岩は中空であるが、長い間の風化作業で上部が崩れており、終いに穴ではなくなる可能性がある。

大金久の集落は海に面しているが港はない。県道に面して大金久防災会館と呼ぶ集落の公民館があり、その脇に今里の集落と同様、土俵が置かれていた。

続く集落が大棚である。大棚も三方を山で囲まれているが、奥が深いので平地の面積は大

金久に比べると広い。したがって世帯数は 100 を超え、村役場のある大和浜に次いで大きな集落だ。大和の集落には大和小学校があり、戸円と大金久の両集落の学区で、在校児童は 10 名である。

集落の前の海は埋め立てられて、地方港湾の大和港大和地区が整備されている。港湾内には漁船が 9 隻係留されていたが、うち 7 隻は船外機だった。また 4 隻の船外機が陸揚げされていた。おそらく隣の大金久集落の人々もこの港を使用していると思われるが、何れにしてもサンゴ礁内で小規模な漁業を営んでいるものと思われる。



大金久集落のシンボルのトゥルス岩（左）、大金久の集落（右）

まほろば館

大和の集落を過ぎ、県道 79 号を東に向かうと、「まほろば館」という地元産品の直売所があった。地元産の果物、野菜、水産物を売る店で、食品加工場も併設されている。大和村内では唯一の農産物直売所だろう。

大和村の特産品はスモモである。ちょうど時期はずれだったので、生のスモモはなかったが、スモモのアイスクリームが売られていた。アイスクリーム以外にもスモモゼリーやジャムに加工しているようだ。

大和村のスモモは、1950（昭和 25）年に仁添隆三氏が苗 165 本を村に導入し、各集落に配布したのがきっかけで、スモモの栽培が盛んになったらしい。「からり（花螺季）」（台湾原産の小ぶりのスモモ）という品種で、昭和 40 年代に奄美大島各地や徳之島、沖縄方面でも栽培が試みられたがどこも成功しなかった。けっきょく栽培が定着したのは、名瀬の里集落から大和村の今里にかけての東シナ海側だけだったという。

店にはあまり商品がなかったが、旬のタンカンを 1 袋 250 円で購入する。

まほろば館から毛陳トンネル（1,212m、1997 年 9 月竣工）を抜けると、道の右側に比較的まとまった農地が現れた。大和村はほとんどが山地だからこの一帯は唯一例外的である。道路脇に高倉^{たかくら}が 5 棟建っていた。木造で屋根は茅葺き、昔のものを再現してある。

高倉はこの地方でかつて米や麦、豆などの穀類を貯蔵した倉庫である。4 本柱により地面から 1.5m ほどのところに床があるので、ネズミの侵入を防ぎ、水や湿気の害から守り、温度変化を少なくする役割を果たした。かつては南の島々で普通に見られたものだが、近年はほとんど消失してしまっている。大和村では、茅葺屋根の定期的な葺き替えを行い、この高倉の保存に努めているのだ。



大和まほろば館（左）、穀物を収蔵した高倉（右）

大和浜と思勝湾

やがて大和村の中心地に出た。思勝湾^{おんがち}に面して5つの集落がある。大和川沿いの大和浜（左岸）と思勝^{おんがち}（右岸）、その東側の津名久^{つなひく}、湯湾釜、国直である。この5つの集落に大和村の約半分の人々が住む。

大和村役場が置かれている大和浜集落は、行政の中心であり、商業地区でもあった。

思勝集落には大和小中学校、保育所、防災センター、体育館、郵便局、開饒神社^{ひらとみ}、大和カトリック教会などがあり、教育、文化の中心地となっている。

大和中学校は村内に4つあった中学校を2011（平成23）年4月に統合して発足したもので、村内唯一の中学校である。現在の在校生は31名で、全集落の生徒がここまで通っている。なお小学校は上述したように大和小学校の他に今里、名音、大棚にあり、何れも明治11～12年にかけて開校した古い歴史を有している。

開饒神社は1882（明治15）年に建立された。この神社の祭神は奄美大島にサトウキビの苗をもたらし、糖業の基礎を築いた直川智翁である。直川は大和浜の農家に生まれた。1605（慶長10）年ごろに琉球へ渡る途中、暴風に会い現在の中国福建省に漂着した。この地に約2年滞在し、そこでサトウキビの栽培と精糖の技術を学んだ。そして国外への持ち出しが禁止されていたサトウキビの苗を密かに隠し持ち、帰国。戸円の集落に植えたのが、奄美大島におけるサトウキビ栽培の始まりで、その後、全島に広まったという。これは「奄美歴史浪漫探訪」の案内板に書かれていた要旨である。



大和小中学校の正門と校舎（左）、直川智翁を祀る開饒神社（右）

奄美野生生物保護センター

恩勝の集落の奥の方に、環境省の「奄美野生生物保護センター」がある。2000（平成12）年4月にオープンしているからすでに23年目に入る。16時30分が閉館時間（入場は無料）であった。閉館間際の時間になっていたが飛び込み、展示物をざっと観た。

このセンターは、奄美地域に生息するオオトラツグミ、アマミヤマシギ、アマミノクロウサギなどの希少な野生生物や固有の生態系の調査研究、保護増殖、普及啓発などの事業を総合的に推進するための拠点として整備された。展示棟と研究棟で構成され、奄美地方の特徴的な建築物である高倉をイメージしたデザインになっている。

2021（令和3）年7月、奄美大島と徳之島はアマミノクロウサギに代表される希少種を含む多様な生物が生息生育していることが評価され、沖縄北部と西表島とともに世界自然遺産に登録された。すでに2003（平成15）年の時点で世界自然遺産の候補になっていたから、このセンターは自然遺産登録を後押しする目的でつくられたのかもしれない。



奄美野生生物保護センターの外観（左）、アマミノクロウサギの標本展示物（右）

湯湾釜と国直

恩勝港から北に向かうと、湯湾釜の集落に入る。集落の手前にクルマエビの養殖場があった。岩崎産業(株)の奄美養殖場である。国直トンネル（260m）を抜けると国直の集落になる。こちらにも個人経営のクルマエビ養殖場があった。

宮古崎トンネル（2,316m、2020年6月竣工）を抜け、再び奄美市に入った。名瀬湾を挟んで東シナ海に面する西側は下方地区と呼ばれ、根瀬部、知名瀬、小宿、朝仁の大きく4つの集落で構成されている。

奄美市に入るとヘアピンカーブが連続する山道になり、やがて海に出たところが最初の集落の根瀬部である。朝仁からトンネルを抜けると、名瀬港に出る。ここからは奄美市の市街地となる。

日没近くにこの日の宿である「ホテルニュー奄美」にチェックインした。夕食は加計呂麻島の漁師が経営する「居酒屋脇田丸」でブダイの唐揚げなどを食べる。



岩崎産業のクルマエビ養殖場

令和5年2月20日

【名瀬下方地区・市街地】

名瀬港

7時15分ごろ「ホテルニュー奄美」を出発し、名瀬湾に整備された重要港湾・名瀬港に行った。

名瀬湾は三方を山に囲まれ、深い入江を有する天然の良港である。1801（享和元）年に薩摩藩の代官所が赤木名から名瀬に移設されると、官公庁街が形成され、人・物・情報が集まるようになる。港町が形成され、奄美大島の中心地に発展していった。そして昭和40年代からは湾の埋め立てが本格化し、現在の姿になった。名瀬港は奄美大島における物流及び観光の拠点であり、また鹿児島と沖縄のほぼ中間に位置することから避難港としての役割も担っている。

現在、名瀬港は4つのゾーンに分かれている。湾の西側は、①湾口部の博物館や奄美文化センター、そしてクルーズ船が停泊する観光船バースのある長浜地区、②奄美大島と奄美群島、本土、沖縄本島などを結ぶフェリーが発着する新港地区、③湾奥の旧港地区である。旧港地区は漁船の係留地になっており、名瀬漁協の事務所と荷捌場が置かれている。一方、湾の東側は小さな湾の埋め立てが進められ、そこに市営、県営の住宅が建つ。その前面が④貨物港湾となっている。

湾奥にある奄美漁協の魚市場（荷捌場）に行ったが、すでにセリは終了していた。市場の関係者が残っていたので、少し話を聞く。セリの開始時刻は6時30分からだったようだ。この日の売買参加者は6社で、通常より少なかった。この市場は島内消費向けが中心で、発生セリで取引されている。グリーンストアと書かれた地元の小売店らしき保冷車が停まっていたので、売買参加者は市内のスーパーなどの小売業者が中心のようだ。

出荷仲買はおらず、島外に出荷する魚介類はクーラーボックスに収納してフェリーで直接、鹿児島の市場に送っている。鹿児島の市場で混載された漁獲物を魚種別に選別するらしい。このクーラーボックスを漁協の職員が移動していた。

荷捌場の港を挟んだ対面には、漁協の購買店舗、「奄美小町」という名瀬漁協女性部が運営する簡易食堂兼加工施設があった。朝早い時間帯であったので、両方とも入口が閉まっており、実際に営業しているかどうかは確認できなかった。ただ、「奄美小町」はコロナ渦で営業を中断していたので、おそらくその状態が続いているものと思われる。



重要港湾・名瀬港の全景（左）、湾奥にある名瀬漁協の荷捌場（右）

小宿と名越佐源太

名瀬港から最初のトンネルを抜けると朝仁^{あさにし}の集落、さらにもう一つのトンネルを越える^{こしゆく}と小宿の集落になる。両集落とも3方を山に囲まれ、河川の河口域に家々が並ぶ。小宿の集落の中央を流れる小宿川は比較的規模が大きい^{あき}ため、下方地区のなかでは最も世帯数、人口が多い。令和3年3月末の住基台帳上の世帯数は1,845戸、人口は3,588人であった。

集落の中央付近にカツオ漁船・昌栄丸慰霊碑が置かれていた。戦前の小宿はカツオ漁がさかんな土地で、小宿カツオ組合が組織されていた。組合は2隻のカツオ船を有し、戦時中も操業していた。このうちの一隻、「昌栄丸」は小宿を出航し、横当島^{よこあてじま}沖でカツオを釣って帰る途中、米軍の爆撃機 B29 によって機銃掃射され、乗組員 20 名のうち、死者 8 名、重傷者は 6 名に及んだ。時に 1944 (昭和 19) 年 10 月 10 日のことであった。

小宿は「南島雑話」を著した名越佐源太 (1820~1881) の流刑地であった。名越の居住地跡を訪ねようと探したがなかなか見つからず、登校中の児童の誘導にあたっていた人に聞いてようやくたどり着いた。小宿小学校の近くだった。

名越は薩摩藩の上級武士で、和歌、書画、医術、本草学にも通じていた教養人であった。1849 (嘉永 2) 年に起きた薩摩藩主島津斉興^{なりおき}の跡目争いに関与したとして謹慎免職となり、奄美大島へ遠島処分となった。名越は 1850 (嘉永 3) 年 5 月 8 日に小宿村の藤由気^{とうゆき}の家を借りることが決まり、この地に移動した。1854 (安政元) 年に罪が許され、翌年 4 月 2 日には赤木名に移動、船を待って 6 月 10 日には奄美大島を離れている。約 5 年間奄美大島で暮らしていたわけだ。

島に滞在中は小宿の子供たちに学問を教えるとともに、嶋中絵図書調方に命じられてからは島中を調べてまわり、当時の奄美大島の民俗学的資料として後世に評価されることになる「南島雑話」を残している。この中には農作物の栽培法、大島紬や芭蕉布の製造法、衣食住に関する記録がまとめられている。



小宿集落に置かれている昌栄丸慰霊碑 (左)、名越佐源太の居住地跡 (右)

小宿からヘアピンカーブの峠を越えた先に知名瀬の集落があり、集落の前面には地方港湾の知名瀬港^{ちなせ}が整備されている。サンゴ礁を掘削してつくられており、1990 (平成 2) 年 3 月に完成したようだ。かなり広い埋立地があり、港は広い。しかし船は小型のプレジャーボートなどが 10 数隻あるだけだ。港内はガラガラの状況なので、避難港としてつくられたのだろう。

知名瀬の集落から短いトンネルを抜けた先が根瀬部^{ねせぶ}の集落である。こちらは 94 戸、人口 157 人 (2021 年 3 月末) の小さな集落である。

金作原^{きんさくぼる}原生林に行こうと知名瀬の集落に入ったものの、集落内の道は細く、入り組んでいて迷ってしまった。ゴミを出しに出てきた女性に道を聞くと、金作原へはガイドなしでは行けないとのことだったので断念して、名瀬の市街地に引き返した。

名瀬漁協

名瀬港に戻り、再び湾奥にある名瀬漁協に出向いた。2階の事務所で酒井裕さんに取材した。酒井さんから「奄美漁業誌」という分厚い本と漁協がつくったタオルなどをいただいた。

上述したように奄美市内の笠利町、住用村の両漁協、龍郷町漁協、大和村漁協の4漁協は2005（平成17）年に広域合併して奄美漁協になっているが、名瀬漁協はこれには加わらず昔のままである。令和3年12月末時点の組合員数は正58人、准477人の合計535人であった。准組合員が500人弱に及ぶのは資格審査が比較的甘いためだろう。なお職員は6人とのこと。

2018年漁業センサス時の経営体数は53で、会社経営：1、生産組合：1（上述した宝勢丸鰹漁業生産組合）で、個人経営体が51という内訳である。漁業就業者数は67人であったが、正組合員数からみて現在はさらに減っていると推定される。奄美漁協の組合員はUIターン者があり、相対的に若い。名瀬漁協の場合は受け入れ態勢が弱く後継者いない。このため漁業者は60～70歳が中心で、高齢化が進む。

名瀬漁協の組合員が営む漁業は、カツオ一本釣り、マグロ旗流し、袖井か釣り、曳釣り、深海一本釣り、リーフ内での潜水漁業などである。養殖業は営まれていない。カツオ一本釣りを営むのは上述した宝勢丸鰹生産組合だけだ。漁場は奄美大島の近海になる。

マグロ旗流しは主にシビ（標準和名：キハダ）を対象とする。そしてマグロ旗流し漁船はソデイカ釣りを兼業している。旗流しは6～10月、ソデイカ釣りは11～5月ごろが漁期である。マグロ旗流しは比較的大きな漁船で操業するが、現在稼働しているのは3～4隻にすぎない。こちらは複数人で操業しており、兄弟、親子で営むケースが多い。

深海一本釣りはホタ（標準和名：アオダイ）やアカマツ（標準和名：ハマダイ）などを主な漁獲対象とし、周年を通じて営まれている。前者は水深300m前後、後者は水深400m前後に生息する。深海釣りの漁場は宝島周辺の東シナ海がメインである。一本釣りの漁業者は曳釣りも兼業している。曳釣りはカツオやシビが主な漁獲物で、漁場はパヤオ周辺である。



名瀬漁協の事務所（左）、島外出荷用の冷蔵ボックスを積み込む漁協職員（右）

リーフ内では、素潜りでイセエビ、サザエ、ヤコウガイなどが採取され、ブダイなどの魚

類を銚で次ぐ漁業が営まれている。ただし市場に出荷する専門的な漁師は20人ほどで、大部分は自給用である。漁船は1.5～2トンの遊び用が多い。リーフ内の漁業は共同漁業権漁業になるが、名瀬地区と住用地区の共同漁業権は重なっている。

2019（令和元）年の漁業生産量は461トン、生産額は2.12億円であった。令和2年度末の販売事業の委託販売額は1.25億円、購買事業供給高は約3,000万円であり、漁業生産額は下落している。

漁獲物は基本的に鹿児島市内の魚市場に出荷する。夜明けに出発するフェリーに乗せ、夕方鹿児島に着き、翌日のセリにかけられる。一方、島内消費向けは漁協の1階にある産地市場でセリにかけられる。漁協に登録している売買参加者は25人だが、実際に買いに来るのは7～8人とどまる。登録している業者のうち8人は居酒屋や魚やなど直接販売する人、残りの17人は仲買業務を行う人だが、沖縄系の人が多い。

奄美市役所

漁協での取材を済ませてから市街地の中心部にある奄美市役所を訪ねた。市役所の本庁舎の建設は市町村合併以来、準備されてきたもので、2021（令和3）年9月1日にグランドオープンし、供用が開始されている。つまりまだ1年半しか経っていないほやほやの建物である。正面玄関は大島紬をモチーフにしたスクリーンで覆われている。

名瀬の市街地は土地が狭く、広い敷地がないから上に伸びるしかない。このため庁舎は9階建てである。建物の延べ床面積は12,500㎡だ。地下に職員用の駐車場が整備されている。2～4階は執務室で吹き抜けになっている。5階は電算室と大会議室があり、6階が教育委員会になる。7、8階は議会棟に相当し、9階に機械類が配置されている。

来庁舎用の駐車場に車を止め、3階の売店に行く。朝食を食べていなかったので助六寿司とカップの豚汁を購入し、売店前の市民交流スペースで食べた。このフロアには世界自然遺産課、紬観光課など奄美大島ならではの課が置かれていた。4階の企画調整課に行き、市勢要覧2022と統計書を入手する。また6階の教育委員会で名瀬市誌を閲覧、奄美の歴史について記述した部分をコピーする。



奄美市役所の本庁舎（左）、県立奄美高校と県立奄美図書館（右）

奄美市役所の南側に市立名瀬小学校があり、その奥に鹿児島県の大島支庁が置かれている。ここには仕事の関係で何度か来たことがある。

国道 58 号に出て、永田橋の交差点を左折、旧住用町に向かう。途中、県立奄美図書館と県立奄美高校があった。山に囲まれ土地がない条件を反映して、高校も 6 階建てでまるで都会の高校のようだ。市街地は朝戸トンネルの手前までで、このトンネルを抜けると風景はがらりと変わる。

朝戸トンネルと新名瀬トンネルの間あたりを左折し、太平洋岸に向かうと、大川沿いに朝戸、伊津部勝、西田、西仲勝、前勝、名瀬勝、小湊の 7 つの集落がある。また大川の北、海に面したところに崎原の集落が孤立している。これらの 8 集落はまとめて古見方地区と呼ばれている。大川流域の沖積平野は旧名瀬市内では最も農地が多く、かつては穀倉地帯であったと推定される。人口は 1,168 人と住用地区よりも少なく、旧市全体の 3.3% を占めるにすぎない。ただ、時間の関係で残念ながら、古見方地区には行かず、国道をそのまま走り、住用地区に向かった。

【住用地区】

北部の赤木名と南部の古仁屋を結ぶ国道 58 号は旧住用村を縦貫している。

旧名瀬市は周囲を山に囲まれており、朝戸トンネル（1992 年 12 月、1,725m）を過ぎると市街地はなくなり風景は一変、ヘゴの群落が見られる原生林が続く。まるで田中一村の絵に出てくる世界である。

国道 58 号の新和瀬トンネル（2,435m）を抜けると旧住用町に入った。住用地区の面積は 118.13 km² で、龍郷町や大和村よりも広いが、山間部が圧倒的に多く、平地は少ない。

旧住用村の 1955（昭和 30）年の人口は 4,133 人（986 戸）で、奄美大島の 1 市 3 町 3 村のなかでは最も少なかった。人口はその後減少の一途を辿っており、2020 年国勢調査時では 1,188 人（606 戸）となり、この間に 1/4 になった。住用地区は川内、役勝、和瀬、城、摺勝、東仲間、見里、神屋、石原、西仲間、山間、戸玉、市、青久の合計 11 の集落で構成される。



ヘゴの群落（左）、奄美市から旧住用村に抜ける国道 58 号（右）

和瀬

住用地区に入った最初の集落が和瀬である。集落の前に和瀬漁港（第 1 種）が整備されている。比較的広い漁港には小型船と船外機が 13 隻係留されているだけだった。この他に 4 隻の漁船が陸揚げされていた。柴犬と一緒に散歩する老人が通りかかったので、話を聞いた。

この集落には老人ホームがあり、総世帯数は40戸ほどだが、もともと住んでいる住民は24～25戸とのこと。和瀬は昔から漁業の盛んな土地で、冬季に産卵のために回遊して来るチダイ狙いの一本釣漁業が営まれていた。しかし住民の高齢化が進み、現在、本格的に漁業を営むのは2人だけになっている。

現在の漁業は一本釣りがメインで、深場に生息するシロマツ（標準和名：ハチビキ）が漁獲対象だ。またウズマカツオ（標準和名：ハガツオ）やシビ（標準和名：キハダ）が回遊して来る時期は曳釣りで見られる。近年は海藻類が見られなくなり、貝類を中心とする資源は減少、潜水漁業は全く行われていないという。

漁港を眼下に見下ろす高台に水産加工センターが置かれていた。漁業の6次産業化を目指していたのだろうが、漁獲される魚介類が少なく、加工原料の確保が難しくなり、現在は操業されていないとのことだ。



和瀬漁港（左）、水産加工センター（右）

奄美市役所住用支所

小和瀬トンネル（515m）と城^{ぐすく}トンネル（246m）を抜けると、城という集落になる。海岸沿いの道路脇に細長く家々が続き、はずれのあたりに東城郵便局が置かれていた。小さな川を越えた先に鹿児島市内に本社を置くインフラテック^{いんぷらてく}（株）という会社のコンクリート製品の工場があった。

続く集落が摺^{すり}勝^{がた}である。川内川^{かわうち}という比較的大きな河川があり、河口域に東城^{とうじょう}内海^{うちうみ}と呼ばれる汽水湖が形成され、オヒルギやメヒルギで構成されるマングローブ林が広がる。この集落には「三太郎の里」という農林水産物の直売所がある。以前店内をのぞいたことがあるが、あまり魅力的な直売所ではなかった。

川内川の流域は沖積平野となっており、住用地区内では最も農地が多い。川内川の上流に川内という集落があり、川を隔てた先は見里^{みざと}の集落である。川を渡った角地に「奄美体験交流館」というアリーナがあり、ここには入浴施設があるようだが、この日は休館日だった。

三太郎トンネル（2,027m、1989年3月）を抜けると、西仲間の集落になる。ここは旧住用町の役場が置かれていた集落で、住用地区の行政の中心地である。旧役場は現在、奄美市役所住用支所となっていて、近所には公民館、消防署、商工会、農協などが置かれている。

農協の道路を隔てた対面が奄美漁協の住用支所であった。事務所を訪れると、小さな犬にけたましく吠え立てられた。女性の職員1人とそのお母さんらしい人がいて、そのおばあ

さんがこの先の漁村について教えてくれた。住用支所の正組合員は 17 人とのことだった。2018 年漁業センサスによると、住用地区の漁業経営体数は 24 で、漁業就業者数は 27 人であったから、その後、組合員数は減っているのだろう。経営体のうち会社経営が 1 社あり、ここはクルマエビ養殖を営んでいた。したがって個人経営体数は 23 であった。ただし後述するように市の集落にあったクルマエビ養殖場は現在、廃業している。

奄美漁協の正組合員数は 163 人だったので、同漁協の正組合員数に占める住用地区のシェアは 10%ほどと少ない。

住用地区の漁業は釣りが圧倒的に多く、これに刺網が続く。漁業を営むのは上述した和瀬とマングローブ林の先にある山間、戸玉、市の集落が中心だ。



奄美市役所住用支所の建物（左）、奄美漁協住用支所（右）

マングローブ

西仲間の集落を住用川が流れ、西側から役勝川が流入し、2つの河川が合流した河口域に干潟が形成されている。この2つの河川には琉球列島の固有亜種であるリュウキュウアユが生息する。沖縄本島にも生息していたが、1970年代末に絶滅しており、今や奄美大島だけになり、大島ではこの2河川が主要な生息域になっている。奄美リュウキュウアユ保全研究会によって毎年、個体数の調査が行われており、近年で最も多い年（2018年5月）の個体数は全島で57,269尾、このうち役勝川が37,010尾、住用川が11,516尾であった。

一方、両河川が合流する河口干潟にはオヒルギとメヒルギで構成されるマングローブの原生林が広がっている。その面積は31.2haに及び、奄美大島で最大規模を誇り、国立公園特別保護区に指定されている。

マングローブは河口汽水域に形成される植物群落の総称である。その存立には塩分が混ざる河口域の存在が前提になる。奄美大島は大きな島なので河川の規模も大きく、したがって塩性湿地が形成されるが、小さな島にはあまり見られない。ちなみにわが国で最も規模が大きなマングローブは西表島の浦内川や仲間川の河口域だろう。

もう大昔のことになるが、鹿児島県本土の喜入に石油備蓄基地ができることになり、周辺の海域環境を文献調査することになった。当時はまだ環境アセスメント制度は確立していなかったが、これに準じて実施したものである。この時に喜入の海岸にメヒルギが分布しており、ここが北限であることを始めて知った。今でも残っているかどうかわからない。いずれにしても、マングローブの植生を形成する植物は鹿児島県の本土よりも南の島嶼域に限定されることになり、この河口干潟のマングローブは貴重な存在なのだ。

このマングローブ原生林の手前の国道脇に、「道の駅奄美大島住用」と「黒潮の森マングローブパーク」が整備されている。マングローブの学習と観光を兼ねた施設である。マングローブパークにはグランドゴルフ場が整備され、マングローブ内を遊覧するカヌー体験のメニューも用意されている。またセグウェイ（電動立ち乗り二輪車）の体験もできる。



河口干潟に広がるマングローブ原生林（左）、メヒルギの群落（右）

市

西仲間の先の国道沿いに下役勝、中役勝、上役勝の3つの集落があり、何れも内陸部に位置する。この国道を直進すると古仁屋に至る。3つの集落は、以前古仁屋に行く途中で観ている。そこで国道から離れて、マングローブの原生林が分布する住用湾の南側の道路を市の集落に向けて走る。

最初の集落が山間^{やんま}である。小さな河川の谷戸に発達した集落で、集落の背後にわずかばかりの農地が広がる。集落の東側の岬付近に防波堤で囲われた地方港湾の山間港山間地区が整備されている。ここには小さな漁船が8隻ほど係留されていた。

次の集落が戸玉で、この集落にも山間港戸玉地区の港が整備されていて、4隻の漁船が係留されていた。戸玉を過ぎたあたりに碎石場があった。



市の集落と漁港（左）、市漁港の係留されている漁船（右）

最後の行き止まりの集落が市で、ここは漁船が最も多い。山間港市地区の港内に13隻係留され、7隻が陸揚げされていた。何れも5トン未満の漁船ないし船外機だ。川の脇に放棄されたクルマエビの養殖場があった。2018年漁業センサスではクルマエビ養殖経営体が1つあることになっているので、その後、経営不振で廃業したと思われる。

集落内に市営住宅のような長屋が何棟か建っていた。地図にはここから山を越えた南側に青久あおくという集落名が記されているが、現在は廃村になっている。かつては10戸以上の集落があったが、住民の多くは市の集落などに移動したようで、公営住宅のような建物は青久を撤収した世帯が移住したのかもしれない。

鶏飯

12時ちょうどに市の集落を発ち、国道58号に戻り、一路、奄美空港に向かった。

走りながら気づいた商業施設について記しておこう。全国展開するコンビニのうち奄美大島にあるのはファミリーマートだけである。この他に島人マートという地元資本のチェーン店があった。一方、スーパーマーケットはイオン系が1店舗あるだけで、そのほかはJ A系のAコープと地元資本のスーパーだけだった。

名瀬の市街地を通り、本茶トンネル(1055m)を抜けると、龍郷町である。龍郷町役場にちょうど13時に着いた。つまり市から龍郷町役場まで1時間を要したことになる。商工企画課で町勢要覧を、住民課で集落別の世帯数人口のデータをもらう。

続いて「ひさ倉」で鶏飯の昼食をとる。鶏飯を食べたのは、枕崎漁港の仕事で鹿児島に行った時に五洋建設の人に郊外の鶏飯の店に連れて行ってもらったのが最初だった。以来、奄美地方に出かけた折はいつも鶏飯を食べるのが習慣になっている。鶏飯は奄美大島に限らず、奄美群島全体で食べられている郷土料理である。「ひさ倉」は地元でも有名な店で、観光客もたくさん訪れる。この店には過去に数回来ているが、久しぶりに入店した。

今のようにブロイラーが普及する以前、鶏肉は高価な食べ物であったから「ハレ食」であったに違いない。ほぐした鶏肉、錦糸卵、シイタケの煮つけ、紅ショウガ、海苔、葱、パパイヤの漬物、陳皮などをご飯の上に乗せ、鶏のスープかけて食べる茶漬けのようなものだ。

昼食後、給油し、レンタカーを14時に返却する。15時すぎに羽田空港直行便で帰路に着いた。



鶏飯の専門店・「ひさ倉」(左)、鶏飯(右)

【文献】

- 吉野清勇・岩井茂彦編著(2002): 奄美漁業誌, 奄美群島水産振興協議会. 鹿児島県名瀬市. pp. 779.
瀬留カトリック教会記念誌編集委員会(2009): 瀬留カトリック教会献堂100周年記念誌. pp. 177.
名瀬市誌編纂委員会(1983): 奄美のあゆみ, 名瀬市誌. 名瀬市役所. 1-22.
名越左源太/国分直一・恵良宏註(1894): 南島雑話1, 東洋文庫, 平凡社. 東京. pp.